

二〇二二年三月一九日

暗闇に愚痴吐くごとき浅瀬かな
吃水の見えつ隠れつしじみ舟
彼岸寒故郷は遠くなりけり
海原のごとまほろばの麦青む
畑打ちの媪時々腰のぼし
自転車族屯してをる春野かな
膝掛けに愛犬くるむ車椅子
仏足石指のまにまに春落葉
両の掌に栞る木の芽の芳しき
纏れてはしだれて重し雪柳

二〇二二年三月一八日

田一枚ぺんぺん草の花浄土
トロツコの走る菜の花日和かな
若布採る竿一本や老漁師
母がりへ子ら大笹によもぎ摘む
大工らの紫煙くゆらす春の昼
残る日を花の下にて話さうか
春泥にまみれて戻る家出猫

二〇二二年三月一七日

釣船の渦潮抜けて沖根へと
蠟涙を溶かさうべしや春日差し
春望やのたりと与謝の海展け
見てごらん指呼の秀枝に初桜
コロナ禍や手話で感謝す卒業子
一列に並ぶミントの若芽かな
初花や歩いて感謝試歩百歩
月まどか黄砂憎しと思ひけり
見はるかす竜馬の視線春の海

もとこ 宏 虎 満 天 明日香 こそす
せいじ なつき ぼんこ むべ そうけい
あひる 凡士 なつき そうけい
むべ 音吉 素秀 素秀
たか子 凡士 明日香 智恵子
あひる やよい 明日香 みきお

二〇二二年三月一六日

母と子の追ひつ追はれつ青き踏む
娘ら去にてうつらうつらと春眠し
牧開き十勝の麓に駒放つ
会へぬまま永久の別れや鳥雲に

二〇二二年三月一五日

両岸の茶畑つなぐ木橋かな
片言の経誦すごとき初音かな
菜の花の果ては岬の灯台へ
ベビーカー双子の笑顔桃の花
木津川を上るさざ波風光る
山葵田の奔り水手に掬ひ飲む
野遊びの疲れ足湯に寛ぎぬ
芽柳の川筋に沿ふ温泉宿かな

二〇二二年三月一四日

梅東風に尖る明石の門波かな
土筆摘む淀川堤老いけらし
ぎしぎしと唸る水車や露の臺
芽柳の風に纏るる朱雀門
足に馴染む介護シューズや青き踏む

二〇二二年三月一三日

白亜紀の地層に葎黄水仙
荒波の能登を眼下に鳥帰る
うららかやケーキを買ひに車椅子
白壁に交差する影初燕
三世代もて合唱すイースター

そうけい あひる 凡士 はく子
せいじ たか子 凡士 満天 あひる 素秀 凡士
あひる やよい 素秀 あひる

毎日句会みのる選・二〇二二年三月二日